
ベアトリーチェ = チェンチ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベアトリーチェⅡチエンチ

【Nコード】

N5408N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

彼女に誘われて二人で来た画廊。そこにあった一枚の絵の少女の歴史は。実在の人物を扱ったお話です。

第一章

ベアトリーチエ＝チ

エンチ

「絵を見に行かない？」

「絵を？」

「そう、絵をね」

彼女は僕にこう言ってきた。

「見に行かない？今展示会が開かれているのよ」

「ああ、そういえばやってるって聞いたけれど」

「大学でね。それに行きましよう」

「こう言って誘って来るのだった。」

「今からね」

「うん、それじゃあ」

まずはそれに頷く僕だった。

「行こうか。けれどさ」

「けれど？」

「どんな絵なの、それって」

行くことにはしたが具体的にはどんな絵を見に行くのかわからない。それで彼女に問うたのだ。どんな絵を見るのかがそれが問題だからだ。

「どんな絵なのかな」

「レーニっていう人の絵があるらしいわ」

「レーニ？」

「知ってるかしら」

「何処かで聞いたことがあるような気がするけれどね」

確かに何処かで聞いた。しかしそれを何処で聞いたか見たのかはよく覚えてはいない。「画家といえばゴッホとかそうした名前を思い出すが今はそうはいかなかった。」

「さて、誰だったかな」

「わからないのね」

「悪いけれどね」

申し訳ない顔で答えることしかできなかった。

「どんな人だったかな」

「まあそれは行ってみてからの楽しみね」

彼女はまた笑って言った。

「それだったらね」

「そうだね。そうなるね」

「他にも色々な画家の絵があるらしいわ。そうそう、何か凄く綺麗な女の人がこちらを振り向いている絵が宣伝のポスターに載ってたわ」

彼女は僕にこのことも話してきた。

「それがね。見たこともないような美人でね」

「そんなに美人なんだ」

「そうなの。私の次位にね」

今度は冗談でこんなことを言ってきた。

「美人だったわよ」

「へえ、そりゃ見てみたいね」

僕も笑ってその冗談に合わせた。

「是非ね。それじゃあその絵を見にね」

「行きましよう」

こうして話は決まった。僕達はそのレーニという画家の絵と美人の絵を見に行くことになった。次のデートでもあった。デートの場所としては申し分ない。

それでその日曜に行くことになった。行くことであった。

待ち合わせ場所の彼女はデートに相応しく所謂お洒落をしていた。画廊に行くということを意識してか品のある服を着て待ち合わせ場所の本屋に来た。

白いスーツと膝までのタイトスカートだ。いつものローライズの

ジーンズじゃない。それに髪も長い髪を綺麗に束ねて化粧もしつかりとしている。その姿で来たのだ。

「待った？」

「こういう場合は今来たところだよって言うのが礼儀だろ？」

「うふふ、そうね」

「けれど今来たところだよ」

これは本当のことだった。本当に今来たばかりである。僕にしてもいいスーツを出そうとあれこれ悩んだからだ。結果持っている中で一番のお気に入りを着て来た。

「今ね。来たばかりだよ」

「そう。それならいいけれど」

「うん、じゃあ行くか」

「少し本を探していたい気もするけれど」

「それは後でいいじゃない」

それはいいというのであった。

「後でね」

「後で？」

「そうよ。それよりもね」

彼女の方から言う。普段はそれ程でもないのに何故か今回は相手のリードで進んでいる。けれどそのことについて悪い気はしてはいなかった。

第二章

「画廊に行きましょう」

「まずは肝心の絵を見て」

「本はそれからでも買えるからね」

笑つての言葉だった。

「それからに行きましょう」

「わかつたよ。それじゃあね」

「行きましょう」

こうして彼女に引つ張られる様にしてその大学の画廊に入った。

白い壁と紅い絨毯の広間に入るとその白い壁に多くの絵が置かれている。多くの人がそれぞれの絵の前に立つて見ている。

彼女もその広間に入るとだ。笑顔でこんなことを言ってきた。

「いいよね、こういうのって」

「いいんだ」

「こういう高尚なデートもいいじゃない」

その笑顔での言葉である。

「普段こういう場所に行かないじゃない」

「確かにね。それはね」

「だからね。いいわよね」

それだけだというのだ。

「それじゃあ。その絵だけけれど」

「ああ、あの美人が振り向いてきている絵だよね」

「そうそう、それよ」

まさにそれだというのである。

「それを見ましょう」

「いや、ここは一つずつ順番で見ない？」

僕はこうはやる彼女に提案した。

「そうしない？どうかな」

「順番でなの」

「絵は逃げないよ」

これはまさにその通りだった。まさか絵に足が出て歩く訳もない。それであえて焦るなど言った。すると彼女もだ。

「そうね。それじゃあ」

「それでいいよね」

「ええ、わかったわ」

穏やかな笑顔で答えてくれた。

「それじゃあ。ゆっくりとね」

「一つ一つ見ていこう」

こう話して本当に絵を一枚一枚見ていく。絵はどれも見事なものだ。そしてだ。

その目的の絵のところに来た。その絵は。

白いターバンを頭に巻き服も白い。顔は整っているというものはなかった。

今この世にいたらどれだけ注目されるだろうか。楚々とした顔立ちで唇は小さく可愛い形をしている。目は優しいもので儂げな印象を受ける。白くやや面長の顔で眉は細く綺麗なラインを描いている。そこにターバンからこぼれた栗色の髪がある。その美女が今にも消えそうな顔でその絵の中にいた。

そしてだ。その美女のところはその名前があった。

「これがレーニの絵ね」

「そうか、これがか」

「ええと、絵のタイトルは」

彼女が絵の下に置かれている札を見ながら言う。

「ベアトリーチエ＝チエンチね」

「ベアトリーチエ＝チエンチか」

「知ってる？」

「何処かで聞いたかな」

どうもこの絵はイタリアのものらしい。イタリアのことについて

はあまり詳しくはない。それでこの絵のことも絵の美女のことを聞いてもだ。首を傾げるだけだった。

しかしここでだ。後ろから声がしてきた。

「この絵はですね」

「はい？」

「何ですか？」

「今処刑される人を描いたものです」

二人で振り向くとそこにいたのは背の高い男の人だった。六十は超えているだろうか。それでも整った顔は皺一つなく彫刻の様な整いを見せている。白髪は肩まであり姿勢が実にいい。見事な青いスーツを着てそこにいるのだ。

その彼がだ。こう僕達に言ってきたのだ。

「御覧下さい、この表情を」

「そういえば」

ここで彼女が言った。絵の方に顔を戻してだ。

「この表情って何か」

「何か？」

「別れを告げているみたいな顔ね」

その美女を見ながらの言葉だ。

第三章

「本当にね」

「そうだね。憂いに満ちた感じでね」

「とても悲しそう」

「悲しいでしょう。それも当然です」

紳士の言葉はハリのあるものだった。まるで舞台俳優だ。見ているとどうもドルーリィレーンを思い出す。耳は聞こえているのは間違いないがだ。

「彼女の運命を思えば」

「運命をですか」

「それを思えばですか」

「そうです。この美女の名前はです」

「ベアトリーチェ」チエンチですね」

僕が紳士に言った。

「それがこの人の名前ですね」

「そうです、それがです」

「この人の名前ですか」

「当時のローマの有力な貴族チエンチ家の娘でした」

それを聞くと所謂お姫様だったらしい。お嬢様と言うべきか。少なくともかなり気品のある顔立ちである。その彼女の顔をあらためて見て思った。

「ただしです。その主ですが」

「主っていいますと」

彼女が紳士の話を聞いて述べてきた。

「あれですよ。このベアトリーチェさんのお父さんですよ」

「はい、そうです」

「お父さんが酷かったんですか」

「暴虐を極めていました。そのせいでローマにもいられなくなった

のです」

「どうやら相当なことをしたらしい。詳しい話は知らないがそれはわかった。」

「そしてです。ある山城に隠れたのですがそこに彼女を連れて来て「それで？」

「どうしたんですか？」

「慰みものにしました。実の娘を」

「……」

そのことを聞いてだ。僕も彼女も絶句した。こうした話があるのは一応死つてはいた。しかしそれを実際に聞くとだ。言葉を失うしかなかった。

「何度も何度もです。彼女の美貌を見てです」

「何、それ」

彼女は蒼白になった顔で呟く様にして言った。

「実の娘をつて。この人をなの」

「そうです、その通りです」

「そんなの。人間のすることじゃないじゃない」

真つ青になった顔のままと言う彼女だった。

「そんな奴だったの」

「はい、だから非道を極めた人物だったのです」

その父のことであるのは言うまでもない。

「ありとあらゆることにおいてです」

「それでどうなったのですか？」

僕もまた顔面蒼白になっていただろう。自分でも表情が凍り付いているのがわかる。その状態で紳士に対して尋ねたのだ。尋ねずにはいられなかった。

「処刑と仰いましたが」

「はい、その自身を陵辱した実に父を殺しました」

そうになったのだという。それを聞いて僕は少しほっとした。そうしたことをする奴が殺されるのは当然だと思うからだ。人間の行動

じゃない。彼女と同じ考えだ。

「継母や兄達と共にです」

「そうですか。それで何故処刑に」

「父殺しの罪です」

「えっ、何ですか!？」

それを聞いた彼女の言葉だ。

「何で処刑されるんですか?そんなことをした奴を。自分を辱めた奴を殺したのに」

「確かにそうです」

紳士もそれは認めた。自身への仇討ちのことはだ。

「しかしです」

「しかし?」

「親殺しは罪です」

今度言ったのはこのことだった。

「これは否定できませんね」

「それですか」

「その罪に問われ。それに」

「それに?」

僕はすぐに紳士に聞き返した。

第四章

「何があつたのですか？それで」

「当時の教皇の思惑もあつた様です。チエンチ家の財産を自分のものにする為に彼女達をです」

「えっ、何ですかそれ」

それを聞いてだった。彼女は眉を顰めさせて思わず声をあげた。

「それって。じゃあ親殺しを口実にして」

「そうだったとも言われています」

「酷い、そんな」

彼女はそこまで聞いてさらに驚いた声を出した。

「そんなことの為にですか。見殺しにしたんですか」

「ベアトリーチエは家族と共に激しい拷問を受けました」

「拷問まで」

「当時の取り調べはそれにより行われるものだったので」

それがその頃だったのだ。拷問による自白が当然と考えられていた時代だった。僕もこのことは学校の授業で聞いていた。あまりいい話じゃない。

「それもありました」

「そうだったんですか」

「しかし彼女は気丈にも最後まで耐えて」

これは信じられなかった。肖像画にある顔からはとても。

「そのうえで処刑場に連れて行かれました」

「結局処刑されたんですね」

「はい、教皇がチエンチ家の財産を手に入れる為に」

「教皇がですか」

「教皇だからです」

僕への返答はあえて素っ気無くしているものだった。

「だからです」

「教皇だからですか」
「当時の教会は腐敗していました」
紳士は今度はこのことを述べたのである。教会の腐敗をだ。
「教皇ですらそうで」
「それで財産をですか」
「その為に彼女の命は不要だったのです。何しろ実はこれは冤罪であるという説もある位です」
「冤罪!？」
僕も彼女もその言葉には顔をさらに顰めさせてしまった。
「冤罪って」
「じゃあその。手籠めや父殺しも」
「あくまでそうした話があるということですよ」
その冤罪についての言葉だ。
「真相はわかりません」
「そうですか」
「しかし彼女が死んだのは事実ですよ」
このことはなのだという。
「若くして。美貌の彼女がですよ」
「わかりました」
僕は紳士の今の言葉に無理矢理納得した顔で頷いた。
「そういうことですか」
「そうです。そしてですよ」
「はい」
紳士の言葉に頷く。
「今は自身が幼い頃に育った修道院に眠っています」
「修道院に？」
「そこでの日々が人生で最も幸せだったとのことですよ」
「こつ僕の横の彼女に答えたのである。」
「ですから」
「それでなんですか」

「その幸せだった場所に眠りたいと。本人も言っ
てまた言う紳士だった。」

「それでなのです」

「成程、それでなのですか」

「はい、それでなのです」

また言う紳士だった。

「彼女は今その修道院で静かに眠っています」

「実の父に辱められ」

僕はここまで聞いて言った。

「そしてなのです」

「はい、そしてです」

「教皇に見捨てられ、若しくは陥れられ」

事実はそのにあつた。

「そしてなのです。今は」

「はい、静かに眠っています」

「そうですか。眠っていますか」

僕は納得したような声になっているのを自分でもわかつていた。

第五章

「それは何よりです」

「そして今ここにいます」

紳士の話がここでまた変わった。

「この場所に」

「そうですね」

彼女が振り向いた。そして肖像画を見る。

「ここに」

「そうです。この肖像画は今処刑に向かう時に描かれたと言われています」

「処刑にですか」

「はい、処刑にです」

紳士は静かに言った。

「今赴くその時にです」

「成程、そうなのですか」

「そうです、この時二十二歳でした」

確かに若い。当時は結婚している年齢だろうがそれでもかなりの若さだ。

その若さでこの世を去る。聞いているだけで悲しいものになる。

美人薄命というがそれでも尚更だ。その経緯が経緯だけにだ。そう思えて仕方がない。

「僅か二十二歳で」

「処刑されましたか」

「そうになりました」

「わかりました。それが彼女でしたか」

「この絵の彼女はそれから処刑されました」

その罪でだ。

「そして今はここにいます」

「そういうことですか」

「この絵はよく御覧になつて下さい」

紳士はその絵をいとおしげに見ている。そこには悲しむものもある。

「よく」

「はい」

僕より先にだった。彼女が応えた。

「そうさせてもらいます」

「宜しく御願います。それでは」

「はい、それでは」

「また機会があれば御会いしましょう」

僕達は別れを告げあいそのうえで別れた。二人に戻った僕達はまた肖像画に顔をやった。そしてそれから二人で話をするのだった。

「そういうことがあつたんだね」

「そうね。この人に」

「そして今ここにいる」

紳士の言葉を自分の言葉でも出した。

「そういうことだったんだね」

「そうね。ずっと私達に顔を向けてくれていて」

「今は別れじゃないね」

この世に別れを告げる時の絵だ。しかし既にこの世を去っている。ならば違うのは道理だった。

その顔でだ。また話す僕達だった。

「僕達をじつと見てね」

「自分のことを知ってもらいたいのかしら」

「そうかもね。幸薄かった自分をね」

「知ってもらいたいのかもね」

「ええ」

ここで彼女が僕に言ってきた。

「この人のこと忘れないでいきましょうね」

「そうだね」

僕も彼女のその言葉に頷いた。

「せめてね。そうしていよう」

「それじゃあ。ずっとね」

「うん、ずっとね」

「覚えていましょう」

その白と黒のコントラストの中にある悲しげな表情を見ながら僕は決めた。せめてこの人のことを忘れないでおこうと。この人の為に。そう画廊の中で決めたのだった。

ベアトリーチエ∥チエンチ 完

2010・5・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5408n/>

ベアトリーチェ = チェンチ

2010年10月8日14時14分発行